

戦姫絶唱シンフォギア BR

恋文

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「……私は、要らない子なんだッ！　何処へ行つても！」

少女は心の声が聞こえる。

「居場所なんて、無かつたのに……それで、良かつたのに！」

捨てた居場所に戻らぬ為に、彼女は1人、歌い上げる。

—G n i t a h e i d r G r a m v o n r a x e l t r o n

初めまして、恋文と申します。

この作品は『戦姫絶唱シンフォギア』シリーズの二次創作となります。

処女作ですので、分からぬことも沢山ありますが、生暖かい目で見て頂けると幸いです。

目次

A c t 1 : オモイデリセット	—	—								
A c t 2 : ヌクモリリターン	—	—								
A c t 3 : 魔剣、再起	—	—								
A c t 4 : 魔剣の少女	—	—								
A c t 5 : オモイガミ 前編	—	—								
A c t 6 : オモイガミ 後編	—	—								
A c t 7 : 真実	—	—								
A c t 8 : The unnamed	—	—								
o d d e s s	—	—								
A c t 9 : 暗闇の先へ	—	—								
A c t 10 : 日常に神は溶け込んで	—	—								
64	56	49	g	42	33	26	20	16	10	1

Act 1：オモイデリセツト

……雨が降る。

傷に沁みるが、もう、どうでもいい。

私は

人でなし、なのだから

「まーたサトリが歩いてやがるぜ」

「うわ、まだ生きてたのアイツ……」

「アイツの兄さんを見習つて死ねよ」

——ヒュッ

「いつ……」

額に石が当たり、血が流れる。
『はつ、ざまあ！』

『無様に石喰らつてやんの！』

「……心の声ダダ漏れ」

「なんか言つたかよサトリ！」

蹴られる。

「……別に、なんでも？」

「はー、お前もうそろそろ死ねよ……必要ねえからさ」

「そうそう。家族揃つてしまえ事しやがつてよ……」

父が研究職で何が悪いのだろうか？

思つていたが口には出さない。

まあ、いつもの事だ。

放つておいても問題は無いだろう。

——確かにこの時までは、そう思つていた

3 A c t 1 : オモイデリセット

馴染みの駄菓子屋——店主はあまり良く思っていないようだが——で、いつもの水飴を買って帰る。

だが、いつもは聞こえない音が聞こえた。

——焦げ臭い匂いと共に

私は走った。

水飴を落とすのも、転んで膝を擦りむくのも構わずに。

暫く走って、家に着く。

本当なら、あんなに明るくなかったはずだ。
なのに、どうして……

燃えているんだろう？

「お父さん！」

「うるせえ、こうしなきやお前は殺せないだろ？ サツサと入れよ！」
「きやつ！」

『可愛い声出すんじやねえよ』

『あー、こんな事なら1回でもヤつてから殺すんだったかな？』
『キモ……今更命乞い出来ると思うんだ……』

有象無象の声が聞こえる。

心の声が聴覚に捩じ込まれる。

兄が死んだ時のように、涙が込み上げてくる。

「お？」

「アイツ立つたぞ！」

「私は……死んじや、ダメだ……お父さんを、助けなきや……！」

そうだ、助けなきや

助けなきや、助けなきや

扉に手をかける。

ノブは流石に熱くなつていた。

でも痛くなんてない。焼けてても動けば構わない。

ドアがゆっくりと開く。

幸い、まだ家中はあまり燃えていない。

駆け足で書斎へ向かう。

研究者である父は、仕事に誇りを持った人間だ。

——ならば、私よりも生きていて価値はあるだろう。

書斎の戸を開く。

「お父さん！　逃げよう！」

「しょうこ
唱子か、必要ないさ」

シユツ

それはお父さんがマッチを擦る音だった。

「なんで……？」

「僕は生きていてもこれからは成果を残せないよ。だから……唱子にこれをあげる」

投げ渡されたのは、ペンダント。

「……それを持って逃げて」

「でも！」

「……早く！」

窓が開けられ、私は突き飛ばされる。

その直後——書斎があつた場所は炎に包まれた。

こんな形で、お父さんとは別れたくなかつた。
手の中のペンドントが熱を持ち始めた。

『キミは、どうしたい？ 父親を殺されて……』

「……許せるはずがない」

『……そうか、なら……』

「力を貸せッ！」

G n i t a h e i d r G r a m v o n r a x e l t r o n

「……なんだよ、あの光」

「虚偽威しじやねえの？ 最後の抵抗的なさ！」

『虚偽威しかどうか……試してみる？』

私の声は鱗割れていて、原型は残していない。
手に握った小さな剣を、近くの奴に投擲する。

……綺麗に首と胴が別れてしまう。

私がやつたのか？ いや、コレは人の形をしたモノだ。無くなつたつて構わない。

『……無辜の命を奪つた……報いと知れ』

それが本当に私なのかは、私も知らない。

投げ上げた小剣を幾つも幾つも殴り飛ばす。

人の形をしたモノの動きは命中するだけで止まつていく。

……彼女の纏う装甲は、蒼穹の如き空色から、血染めの赫へと変わつていた。

家が燃え尽きるまで、彼女はモノを壊し続けた。

首を断ち、

細切れにし、

縦に2つに切り落とし……

いつしか、彼女の住んでいた小さな街の人間は、いなくなつていた。

「……」

仮面を外した少女は、血染めの装甲を嘲笑うように、歪んだ笑みを零した。

「……バイバイ、お父さん」

宛もなく、少女は歩き出す。

先の水飴には蟻が集つていて、少女はそれを踏み潰した。

Act 2：ヌクモリリターン

「新たなアウフヴァアツヘン波形、ロストしました」

「翼、状況は？」

赤い上着を着た筋骨隆々の大男、風鳴弦十郎は現場に通信を繋いでいた。

『……これは……！』

転送されてくる映像には、惨憺たる情景が映し出されている。

本来ならば、『のどかな田舎町』といった所だろうか。しかし、その雰囲気は既に損なわれている。

映像に映し出されたその町には、生きている人の姿がない。

刀傷を負い、死している者だけだ。

『……一体、誰が……ッ！』

「現場の状況は分かった。翼、帰投してくれ」

『……了解しました。本部へ戻ります』

町に降りしきる雨は、未だ止まない。

「……」、どこだろ」

私はあの町から離れ、いつしか夢見た都会……みたいな所へ来た。
あの時から降り続いていた雨は止んでいて、肌寒さは無くなっている。
「……疲れたな……人の声も、あれから、聞いてない……」

闇に落ちる意識。

それでも、離すものかと握り締めたのは、あの赤いペンダントだった。

「……お、大丈夫か!？」

遠くなる聽覚で、男の声を聞きながら。

「参ったな……路地裏で倒れてる女の子なんて、昨今の小説でもあんまり見ないぞ」俺は倒れる黒髪の少女に駆け寄ると、先ずは手に触れてみる。

「……つて、冷たつ!? それに、服が濡れてて重い……」

片手で携帯を取り出すと、彼は職場へ電話を掛ける。

『もすもす終日^{ひねもす}? あ、どーもどーも、カフェ・エスタです! つてなんだよ、新じゃ

ねえか』

「惣一^{そういち}さん、路地裏で女の子が倒れてるんですよ、どうします?」

『どうします?』じゃないだろ……そもそも俺に掛ける電話じやない』

「だとしても、ですよ。放つておけない』

『……分かつた分かつた。俺の負けだ。ナナミをそつちに寄越す。場所は?』

「店の近くですよ。商店街の裏通り」

『OK、分かつた。ナナミー!』

プツッ

ツー、ツー、ツー……

「……とりあえず上着、掛けたあげよう。ナナミが来るまでにもつと冷えたら大変だ」着ていたコートの上を少女に掛け、新は同僚を待つことにした。

「……？」

私の意識が戻る。

体を見ると布団に包まれていて、先程までより暖かい。
服もどうやら着替えさせられているようだ。

「……なんで、体操服？」

「それ、私のだから」

「……!」

横から唐突に聞こえてきた声で、部屋に何人か人がいることに気づく。

『……良かつた……』

『何か持つてきた方がいいよね……うどん、とか』

『眠いけど、彼女のためだし仕方ないか……』

『……えっと、貴方達は?』

「ここ」の従業員。カフェ・シエスタのね

カフェ・シエスタ。

聞き覚えがないが、おそらくこの街の喫茶店なのだろう。

「しても、どうしてあんな所に?」

「……親がいなくなつて、行くあてもなかつたから、ここまで歩いてた」

「歩いてた!?」

『それならあんなに濡れてたのも分かる。ここ最近は雨続きだつたし……』

耳を通して、発していない言葉が聞こえる。

昔からの体質だ。本来聞こえちゃいけないはずの声が、私の耳に入つてくる。

思えば、このせいであの町だと『サトリ』とか呼ばれてたんだつけ。

「……とりあえず、暫くここにいていいよ。引き取り手が見つかるまで……だけど」

「……え、いいんですか？」

「勿論勿論！ 袖すりあうも一蓮托生つて言うでしょ？」

「それ、『袖すりあうも他生の縁』だから」

「そつちかー……！」

「こつち以外無いから」

ガヤガヤとなる4人に、私は少し劣等感を覚える。

「私も、こんな体質じゃなければな……」

「ん？」

「いえ、別に」

囁き声に気づいたようだが、誤魔化しておいた。

「だつたら自己紹介しよつか！ 私は月峯ナナミ！ この店の隠れた看板娘！ よろしく

!

「『隠れた』つて自分で言わない方がいいでしょ……前川ミソラね、よろしく」

「俺は尾山新。おやまあらた。 マスターの惣一さんを除けば俺が唯一の男手かな……えっと、よろしく」

「新はキミを見つけてくれたんだよ！」

「ちょ、おい、ナナミ！」

「ホントの事じやーん！」

そう言つて頬のつねり合いをする2人を見て、私は……自然に、笑みが零れていた。

「あ、初めて笑つた」

「うーん、とつてもキューート！ これは名前を聞くしかない！」

聞かれたならば答えねばなるまい。

「……櫛原唱子くしはらしようこ」

「ショーコちゃんか！ よろしくね！」

「……カフエ・シエスタにようこと」

笑いかけてくる3人を見て、私にいつからか欠けていたピースが嵌つたような気がした。

Act 3：魔剣、再起

唱子がカフェ・シエスタに来てから3日。

彼女は今、店の手伝いに駆り出されていた。

「ショーコちゃん、ごめんね？」

「いいんですよ、ここにいるためですから……」

接客や珈琲の淹れ方までを教えているのは、月峯ナナミ。

本来ならばマスターが教えるべきだ、とは彼女の弁だが、居ない者は仕方がない。

新達も教えられない訳ではないが、今店にいるスタッフの中で、1番長く勤めているのは紛れもなくナナミだ。故に、白羽の矢が立つたのだ。

「ほらショーコちゃん、新しいお客様！ 行つてきて行つてきて！」

「……は、はい」

扉が開かれ、鈴の音が鳴る。

入ってきたのは胸元の開いたチューブトップが特徴的な赤毛の女性と、青いボニー
テールが印象的な女性だ。

どちらもサングラスをしており、帽子を被っている。

「い、いらっしゃいませ……2名様、ですね」

「ああ、そうだ」

「此方の席へどうぞ」

唱子が言葉に詰まつたのは応対の最初だけで、そこからは練習通りに出来ている。
「ご注文がお決まりでしたら……」

「ああ、もう決まつてるんだ。話題のパンケーキを頼むよ、2つ」

「かしこまりました。『シエスタのこだわりパンケーキ』2つですね」

そう言つて唱子が店の厨房に注文を伝えに行くと、ナナミが興奮して話しかけてくる。

「ちょっととちょっとショーコちゃん！　あの二人、ツヴァイウイングだよ！」

「ツヴァイウイング……？　ああ、最近ナナミさんがCDを揃え始めた、あの？」

「そうだよ！　なんでここのお店に来たのかは分からぬけどさあ！」

心の声と口に出す声が完全に一致していく、2重で騒がしい。

「ショーコちゃん、パンケーキ上がつたよ。持つて行つてあげて」

「はい」

「ああ待つて！　お願ひだから色紙も持つて行つてー！」

「つて、言われるがままに持つてきたんです。お手数掛けてすみません」「いいんだよ、あたしらもここで気づかれるとは思ってなかつたし」

苦笑しつつ、ショーコが持ち出したサインペンで色紙に文字を書いていくのは天羽奏。

自分の分を書き終えると、ショーコに話を振つてくる。

「そういや、宛名はどうする?」

「……すみません。こういうのよく分からないので、お店の名前でいいですか?」

「分かつたわ。『カフェ・シエスタへ』って書けばいいのね?」

「はい。ありがとうございます!」

パンケーキを運んだトレーと色紙を持つて厨房へ行くと、ナナミがまた話しかけてくる。

「ねえ、これお店のだよね!? 私の分は!?!」

「自分で頼んでくださいよ」

ツヴァイウイングが去った後、額に入れて飾られたサイン色紙を後目に、唱子は買い出しに出ていた。

「確か、ガムシロップと牛乳を追加で買つてきて欲しい……だつけ」

そう言つてメモを閉じ、店に入ろうとする唱子。
しかし、ドアから入ることはなかつた。

滲み出るよう現れる災害。

即ち、認定特定災害こと、『ノイズ』である。

店からも何人もの人が飛び出してくる。唱子も人波に呑まれるが、なんとか体勢を立て直して逃走を図つた。

「……」

しかし、現実は非情。

三叉路に差し掛かつた瞬間、唱子の先を行つていた集団が、まとめて炭へと変化した。

「……」

胸に掛けられたペンドントがまた、語りかける。

—G n i t a h e i d r G r a m v o n r a x e l t r o n

Act 4：魔剣の少女

『翼！ 奏！』

「どうしたおっさん！」

『お前たちの近くで、ノイズの反応が見つかった！ それと……あの時のアウフヴアツヘン波形も検出されている！』

「おい、それってあの村の……」

「行きましょう、奏……ノイズを倒して、可能なら聖遺物の保有者も拘束する」

C r o i t z a l r o n z e i l l g u n g n i r z i z z l
I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n

私がこれを使うのは2度目だつた。

1度目は、あの村を出ていった日。私の過去と決別した日。

…………喪つたものは、とてもとても大きくて、私とシエスタの人達じや、どうしても埋めることが出来なくて。

だから、ノイズが出てきたのは好都合だつた。

「……遠慮なく、殺せるから」

脚の装甲が展開し、あの日と同じように小剣ユニットが浮かぶ。
私はそれを……殴り飛ばした。

『Break / Down』

紅い軌跡を遺しながら舞う小剣に貫かれ、螢光色の雜音は散っていく。
「……ふふっ」

いつの間にか私の口の端はつり上がりつていた。

今まで忘れていた、『楽しい』ことを見つけたような感覚だ。

「……まだ群れは残つてゐる。アレも……」

狙いを定め、小剣を構えるが……
そのまま剣を放つことは無かつた。

『千ノ落涙』

剣の雨、と形容するしかない攻撃。
無論、自分の剣では無い。

「そこまでだぜ、嬢ちゃん」

「後ろ……？」

手早く小剣で文字を刻み、発火させる。

『Runic／Frame』

「熱ツ……」

「次は貴女？」

「調子に乗んな！」

『LAST∞METEOR』

槍から生まれた竜巻で、自分にまとわりつく炎を払い、攻撃に転じる。

「……ツ」

「さつきまでの威勢はどうした？」

「威勢？」

「あたしに炎を浴びせた時のさ。お前、あたしに憎悪みたいなのをぶつけてた……違うか？」

「違う。何となく分かったの。貴女が後ろから来る、つてね」「そうか、よツ！」

当身だつた。

槍ではなく、自分の力を全て使った当身。

「翼！」

「任せて！」

『蒼ノ一閃』

蒼い斬撃。

阿吽の呼吸で放たれたソレは、私の身体を……

「や、やつたのか？」

「……いいえ、まだ」

目の部分が紅く染まつた黒い仮面。

僅かに鱗が入り、口元は既に見えている。

「……貴女達も、私と同じなの？」

「どういうことだ？」

少女は口をつり上げて、自分達の話さなかつたワードを口に出す。

「……シンフォギアっていうんだ、この……力は」

「貴様、何故その名を！」

「貴女から聞こえたんだよ？ 勿論、ついさつき」

クルクルと手で小剣を弄び、少女自分の脚に装着されたアーマーに収納する。

「もうノイズは居ない。私も貴女達に用は無いの。だから……逃げさせて貰うわ」

「そうはいかないな、あたしらだつてアンタを連れてかなきやいけない理由がある……」

「ふうん……まあ、私には関係ないかな」

少女が空中に文字を刻む。それは今では使われない文字の1つ。

北欧の魔術が1つ。

「……バイバイ」

『Runic / Blast』

文字を刻み終えると、周りの碎けた道路が爆ぜる。

「待てッ！」

『止まれ奏くんッ！ ソレは躲してくれ！』

「なんで止めるんだおっさん！」

「奏、貴女を失う訳にはいかないの。私にとつても、二課にとつてもね」

「……クソッ」

奏は、近くの壁に拳を打ち付けた。

その頃、カフェ・シエスタでは小休憩が行われており、新は自室に籠つて1つの調査をしていた。

「……『月浦村の惨殺事件』……か」

きつかけは、彼の友人の知り合いがこの事件の被害者となつたからである。

彼が言うには……

「スッパリ首が切断されてて、かつ凶器は見つかってない。他の被害者は、首だけじゃなく腕だつたり、足だつたり……色んな所が断ち切られていた……か」

パソコンを閉じて、彼の部屋のコルクボードに貼られた独自の調査票に、新たな写真を貼り付ける。

その写真は――

正しく、『櫛原唱子』のものだつた。

Act 5：才モイガミ 前編

「え？ 今日……お店、休みなんですか、惣一さん」

「そうそう！ 今日は月に3回ある定休日さ！ 新は早くに出掛けちまつたが……ナナミと唱子ちゃんはどうする？ ミソラとアニメでも一気見するのか？」

唱子とナナミの朝食を用意しながら、惣一は問いかけ、朝の珈琲を淹れる為に珈琲豆を挽き、粉にしていく。

「あ、そうだショーコちゃん！ そう言えば普段着とか持つてないよね？」

「……え？ あ、はい」

「じゃあ私がショーコちゃんに似合いそうなの買つてあげるからさ！ ちょっと電車に乗っちゃうけど、『イネス』に行かない？」

「……え、ええつと……」

「新におしゃれしたショーコちゃんを見せて、がつちりと骨抜きにしちゃおう！」

「……」

唱子は抵抗するだけ無駄だと思つたのか、ナナミの勢いに押されたのかは分からぬが……ずり落ちていた眼鏡を整えると、小さく首肯した。

「じゃあ決まり！ イネスに行くまでの服は私が貸してあげる！ 私が中学生の時に着てた奴だし……何より、ショーコちゃんにも着てみて欲しいし！」

「……ええ……」

「ナナミ、程々にしてやれよ～」

小一時間程、ナナミが唱子を部屋から出さなかつた……とだけ、ここには記しておく。

「来たよ、イネス！ ここ近辺では最大のショッピングモールにして、ボウリング場やカラオケ、果ては病院、公民館までここにある……どんでもない複合型モールだよ！」
「そ、そうなんですか……」

目を輝かせて唱子に解説をするナナミ。

若干唱子は引き気味に、ナナミに尋ねた。

「ナナミさん、何処に行くんですか？」

唱子は分かりきつていたが、敢えてナナミに行先を尋ねた。

「うーん……先ずは、洋服からかな！ 着いてきて！」

勢い良くナナミは唱子の手を握ると、3階の服屋に向かい、走り始めた。

「……到着だ、新」

「ありがとうございます、菊次さん」

「月浦村になんの用なんだよ……」

「最近、うちで新しく住み込みで働いてる娘が、この間菊次さんに渡されたこの村唯一の行方不明者の写真の娘に似てたんです」

そう言つて、印刷された一枚の写真を取り出す。

「そうか……本当にその写真の娘が、この惨状から逃げてきたのなら……いや、まさかな」

「取り敢えず、俺ちよつと村に入つてみます」

「おう、入れ入れ……警察も、流石にもう調べ物は無いみたいだしな」

そう言つて新は、自分のラップトップやメモ帳、デジタルカメラの入つたボディバッグを肩にかけて、菊次の車を降りる。

……全ては、唱子の真実を知るために。

「ねえショーコちゃん、次はこれ着てみない？」

「…………ええつと…………」

そう言つて試着室の前を占拠し、両手どころか脇にも服を抱えているナナミ。

「そ、そんなに買うんですか…………？」

「当たり前じやん！ 私の目の前には、とびきりかわいい眼鏡を掛けた黒髪の女の子……そして私の手には……」

「……手には？」

「服！」

「……つまり、私はそれ全部着るまで出られない……？」

「その通り！ それで、ここでの用事が終わつたらランジエリーショツプ行こうか。ショーコちゃんはあんまり下着だつて持つてないでしょ？ ブラなんか1着も持つてないし……ね？」

唱子は悟った。

“あ、これナミさん本気だ”と。

そして、気が遠くなるほど更衣し、気に入つたものを幾つか、畳んでカゴに入れる。

服の会計が終わると、ナミは直ぐに唱子の手を取り、隣のランジエリーショツプに駆け込む。

「ショーコちゃんは、どんな下着を着けたいとか穿きたいとかあるの？」

「……ええつと……普通に白じやダメですか？」

「いいじやん！ 新も好きそうだしね……」

「え、何か言いました？」

「ううん、何も！ でも白一色だと味気もないし、水色とかもいいかもね！」

「あ、でもその前にサイズ計らないといけないのか……すみません！」

「……まだ、続くの……？」

「……月浦村の地図は……つと」

PDFファイルとしてスマホに落としていた地図を見ながら、新は歩き出す。地図に付いているバツ印は、惨殺事件での被害者の遺体のあつた場所だ。

11

新は地図の1つの場所に目をつける。

そこには不自然な程にバツ印が集中していて、所謂“屍山血河”を築いていたと思われる場所だつた。

「……」からそんなに遠くない

方向を変え、新は進む。

“知らなかつた”で済ませないために。

そして――櫛原唱子を、今一度知るためには。

「沢山買つたよ……久しぶりに！」

「…………ありがとうございます。ナナミさん」

「気にしないで！ シヨーコちゃんにおしゃれして貰いたかつただけだからさ！」

そう言つて、イネスのフードコートの椅子に座り、2人でソフトクリームを食べる。
ナナミはチョコ、唱子はハニーミルクである。

「私もそつちにすれば良かつたかな……美味しそうだね、それ

「……あの、食べますか？」

「ううん、今度来たら試してみるよ。限定から定番メニューになるみたいだし」

「その時は、私に奢らせてください」

「……分かつた。約束ね……つと、じゃあ次はなんだろ……映画観る？ それともゲー
ムセンターで遊ぶ？」

「じゃあ、ゲームセンターで」

「おつけー！ 私のテク、見せてあげる！」

2人は大荷物を店に配達して貰うように手配すると、その足でゲームセンターに向
かつた。

「ここが……」

典型的な家屋 „だつた“ と思しき建物。

壁の至る所は焼けていて、2階の部屋に至っては元の色を残していない。

「……失礼します」

無言の家に一言告げて、新は „榎原“ の表札が下げるられた家に入る。鍵は開いている。まるで……誰かを待ち望むようだつた。

Act 6 : オモイガミ 後編

「櫛原つて、唱子の苗字……だよな？」

扉を開け、至る所が焼けた家に入る。

ここに来たのは純粹な興味だった。

——あの日、路地裏に倒れていた少女。

何処の物とも知れない、裾や袖がボロボロの黒いセーラー服に身を包み、靴底の磨り減ったローファーを履いていて……何より、持ち物が不自然な程少なかつた。

新よりは勿論歳下——後に13歳と分かつた時にはちよつとビックリした——なのだが、その年頃の女子……と言えば、アクセサリーやらに手を出してオシャレをする年頃だと思っていたのだが、アクセサリーとしてはカットされたクリスタルが特徴的なペンダントのみ。

雨の降る中、異様な程に冷たくなつていた少女を、新はいつしか助けていた。

「そして、唱子の制服から月浦村に辿り着いて……この事件を知つた」

新聞にも少ししか取り上げられない、奇妙な事件。

村の人物がほぼ全員殺害され、1つの家は焼けていたという事件だ、という話を、菊

次さんから聞いていた。

「菊次さん、これは？」

「今度、俺が取材しようと思つてた事件なんだがな……そうだ、新……お前も来るか？
前々から気になつてんだろ、あの新人の子のこと」

「……はい。その事件がきつかけなんじやないか、つて思つてます」

「次の定休日、空いてるなら俺の事務所に来い。車は出してやる」

「……ありがとうございます」

「その答えは、きっと……ここにある」

そう言つて、目の前の扉のノブに手をかける。

扉は意外とすんなり開き、新を出迎えたのは……機械群だつた。

電源は未だに点いていて、1部は使えないものの、修理をすればかなり使えるだろう
……そう思わせるマシン。

見れば、大型モニタの下には1本のケーブルが伸びている。

「……」の中に、何か……

そう呟いた時、画面にはこう表示された。

「……Connect the cable to your computer……

ケーブルを貴方のパソコンへ接続してください……か」

新は指示された通り、持ち込んだラップトップを巨大な機械と接続する。

そして……データが表示されると、まず最初に現れたのは……

「……これ、村の門に刻まれてた……」

2本のシダレザクラの枝が、互いに絡み合う紋章。

それが何故、この機械群のデータとして入っているのだろうか。

新は静かにデータの画面をスクロールさせると、興味を引かれるデータが存在する」とに気づく。

「……なんだ、これ……」

想い神。

そう、タイトルに示された物は……

嘗ての月浦村で信仰されていた、人の身に宿る神。

人の想いを受ける杯。

その在り方の、資料だつた。

曰く、想い神とは、現身であるという。
うつしゆ

村の名にある通り、信仰の対象となっていた月浦の人間だ。

その血を引く者は、身体の何処かに家紋を象った紋章が現れる。しかしその信仰は、今から300年前に途絶え、喪われている。

精々が、この村の御伽噲程度の物。

そう言つて、私もこの事には触れなかつた……ある日、私の娘の唱子を風呂に入れるまでは。

「……これをデータに残したのは、唱子の家族……？」

新は思わず、スクロールする手が早まる。

ラップトップに映る画面が、目まぐるしく変わっていく。

唱子の背中、右肩の辺りに現れていたのは、月浦家の伝説の中にしか有り得なかつた筈の、シダレザクラの紋章。

私は櫛原家の家系図を全て洗つた。

祖父や曾祖父の代だけではなく、もつと昔、もつと遠くへ……

そして、見つけてしまつた。

大元を辿れば私にも続く家系……丁度、300年前の世代に……

“月浦”の名があつ

た。

純粹な月浦の血筋が途絶えた時期……そして、信仰が喪われた時期と合致する。同時に、これは避けられない運命だと、感じていた。

「唱子が、いつも俺たちと居ようとしないのは……これがあるから、なのか？」

新がマウスを握る手にはいつの間にか軋む音がする程に力が入つていた。

それ以降、私は唱子に構う裏で、想い神の伝承を可能な限り搔き集めた。
そして、分かつてしまつた。

想い神の任から解放される事は、今ではもう出来ない、と。

ことづて言伝だつたのだ。月浦の伝承を洗つても、月浦家の想い神が祀られ信仰されていた、今は寂れた月浦神社にも。

どこにも、想い神からの解放をするための儀式なり方法なりが載つた本や資料は無かつた。

その事に気付いた時、既に唱子は小学校へと上がつていた。

「……」

絶句する、とはこういうことなのだろうか。

一介の高校生が関わるべき事では無い。

ただ……

「……なんで、唱子は……何も言わないんだよ！」

遂に、と言つてしまつては行儀が悪いし、唱子にも失礼だとは分かつてゐるが……所謂、『いじめ』が始まつた。

子供と言うのは妙に鋭いところがあり、唱子の異常性にも直ぐ気付いたものだ。それを、唱子は6年も堪えたんだ。私は……父親として、力には何もなれない事を、痛感させられた。

小学校卒業の時に、全て唱子から聞かされた。

靴を隠された事。

学校の池に落とされた事。

ズタズタにノートや教科書、果ては下着すら引き裂かれた事。

盗まれた下着が、汚されて返ってきた事。

泣きながら話す唱子の背中を、私は摩る事しか出来なかつた。

そして、今。

このデータを閲覧している君には、私の事がどう見えただろうか？

薄情者の父親として見えている事だろう。

事実、私は唱子の体質の研究にのめり込むばかり、唱子の要望もほぼ聞くことは出来なかつた。

燃える家の中でこのデータに最後の更新をしているが、じきにこの部屋にも煙が回つて来るだろう。

閲覧後、唱子に持たせた私の形見と、対として運用する物を君に差し上げよう。
そして、唱子の“剣”的データも。

君がそれをどう扱うか、それは君に任せよう。

櫛原海斗

カシユツ。

小気味いい音を立てて、マシン下部のハッチが開く。

「……ペンダント……なのか？」

先端だけを取り外せば、剣にもなりそうな槍。

それが、蒼いクリスタルの中心部に納められた飾りを持つペンダントだつた。

「……唱子……」

唱子が何故、此処を去つたのか。

それは、未だ分からぬ。

ただ、もし唱子があの事件を起こしたのなら……

「俺は、唱子を……然るべき所に出さなくちゃいけない。けど……そうしたら……クソつ……」

壁に拳を打ち付けながら、新は声を絞り出す。

「…………唱子を、信じるしか……無い、のか？」

一人の人間としては、『どんな理由があつても、人を殺すのは間違つてゐる』と、言うことができる。

でも、尾山新個人としては……そう言うことは、出来ない。

家の外には、いつの間にか暗雲が立ち込めていた。

「ふー、ただいまー！」

「…………ただいま」

「おかえり、ナナミ、唱子ちゃん。あ、これを新的部屋に置いといてくれよ」

「私はこれをシヨーコちゃんの部屋に運んじやうから、シヨーコちゃん、行つてきてくれる？」

「はい」

そう言つて、私は段ボールを持ち上げる。
何を買つたんだろう。

開けるのは憚られるので、速やかに運んでしまう事にする。
「……失礼、します」

主の居ない、尾山新の部屋。

綺麗に片付けられていたが、その中に、あつてはならない物を見つけた。
それを見て、私は思わず、荷物を取り落としてしまう。

「……うそ、これつ、て……」

写真に写つていたのは……

幼い頃の、
唱子自身わたくしだつた。

Act 7：眞実

「ただいま」

「おう、おかげり。新、唱子ちゃんが部屋に色々運んでくれたから行つてやんな」

「分かつた」

「月浦村から戻った俺は、シエスタの裏手にある居住スペースにある、俺の部屋に戻る。

「……ん？」

本来、この時間にこの部屋に居ないはずなのだが、彼女はそこにいた。

「……唱子？」

「……私の事、全部知つてたんですか」

「……ここに唱子が来てからだけどな」

荷物を机に置き、唱子に向き直る。

「最初にその事件を知つたのは、菊次さん……たまに店に来るだろ？　あの人人が話して
るのを聞いたんだ」

「……いつ？」

「唱子が店の手伝いを始める前。村の資料に書いてあつた制服と、唱子の制服が同じ

だつた」

机の引き出しから取り出されるホチキス止めの紙。

確かに、唱子の着ていた制服と同じ、月浦第一中学の物だつた。

「……それでな、その中に気になる記述があつた」

「……まさか」

「そう。唱子……お前の体質だ」

ラップトップに転送したデータを表示する。

唱子の目は、少し開かれた。

「……想い神？」

「ああ。月浦村の伝承に残つていた……想いを受ける者の事だ」

「……巫山戯てるんですか？」

「巫山戯てない！……これは、お前の親父さんが遺してた資料なんだ」

「……お父さんが？」

「ああ」

唱子が少し俯く。そして顔を上げて、新の方に向き直る。

「……新さんは、私が……あの村の人達を殺したの、どう思いますか？」

「……つ」

新の息が詰まる。

しかし、唱子の体質を考えれば、隠せるはずも無い。

「……正直、どんな理由があつても、人を殺すのは間違つてゐる。そう思つてるのは、分か
るだろ?」

「……………はい」

「でも、俺は信じたくない」

「……え?」

おもむろに立ち上がり、唱子に近づく。

「ちよつと、新さん!」

「……人を殺した? 特殊な体質? そんなの唱子には何の関係もないだろ!」

「……えつ……?」

新は、唱子の背中に腕を回し、抱き寄せる。

唱子の顔は紅潮し、動きは止まつてしまふ。

「……約束する。唱子、お前がどんな存在だつていい……」

「……」

「……守らせてくれないか? お前と違つて無力な俺に、櫛原唱子という1人の人間を」
新が唱子に問いかけると、唱子は俯きながら答える。

「……良いですよ」

「……本当か？」

「なら、1つ頼まれてください……」

「……おう」

「……私を、貴方の物にしてくれるなら……守られます。それに……」

唱子も新の腰に手を回し、唱子からも抱き締める。

「……受け入れてくれたの、新さんが初めてですから」

紅潮した顔で笑みを作り、新に笑いかけた。

「菊次さん」

「……おう、緒川の」

「頼んでいた物、調べはつきましたか？」

緒川慎次は、菊次と呼ばれる人物に接触していた。

「……ああ。あの嬢ちゃんで間違いない……彼奴が、『月浦村惨殺事件』の、犯人だ」

「しかし、相変わらず早いですね。流石……風鳴家お抱えの諜報部隊……『韋駄天』の、

隊長です」

「言うようになつたな、ボウズ……お前も似たようなモンだろが」

「はは、僕も貴方に追いつくんですよ」

「……へつ、若くて良いな、お前さんは」

菊次は懐から煙草を一本取り出すと、ライターで火をつける。

「では、僕はそろそろ」

「おう。弦十郎の野郎に宣しくな」

煙を吐き出しながら、菊次は夜空に浮かぶ月を見る。

「……『呪詛』を感じるな……櫛原唱子も、これを受けた被害者のひとりって訳だ……なあ？」

携帯用灰皿に灰を落とし、そのまま火を消すと、緒川とは反対の方向へ歩みを進める。
「さて、お前はどうやって動く？　……尾山、新」

「ありがとうございました」

「またお越しくださいね。お待ちしております」

唱子とナナミが昼時のレジの応対を終えると、一旦店は休みに入る。

「……んでき、ショーコちゃん」

「はい、何ですか？」

「昨日、新の部屋で何してたの？？」

「えっ!?」

唱子はスカートを翻しながらナナミの方を向くと、距離を詰めて問い合わせる。

「なんで、なんで知つてるんですか!? どこまで聞いたんですか!?」

「そりやあ、新が男らしい事を言うところからよ。しつかし、ショーコちゃんも青春して
るね〜……」

ナナミは唱子の耳元に寄り、聞いてもいらない事を喋っていく。

「新は優良物件だよ？ まだまだ高校生だけど、责任感は強いし、何より……あんなこと
言われたんでしょ？ 応えなくちや」

「……でも、私、分からなくて」

「いいのよ、分からなくて。人の恋なんて、分からないことだらけよ？」

「……恋……？」

「だつて、ショーコちゃん……気づいてないかもしねないけど、新の事を話す時、最初か

らどこか……ね」

唱子は、その言葉に耳を傾け続ける。

自らに刻み込むように。

「……ま、決めるのはショーコちゃんよ。伝えるのか、封じるのか……貴女にしか決めら
れない感情だからね」

「……はい」

「よーし！ 休憩終わってからの準備と、お昼ご飯にしよう！」

「あつ、今行きます！」

日常は、確かにそこに溶けていた。

Act 8 : The unnamed goddess

「いらっしゃいませー」

「よう、嬢ちゃん……」

「あ、菊次さん。お仕事お疲れ様です」

唱子が菊次を席に促すと、菊次は首を横に振る。

「いや……今日は、珈琲を飲みに来た訳でも、軽食を取りに来た訳でも無い……」

音もなく、声も無く、菊次は近寄つて来る。

「……っ!?

バ
チリ。

形容するならば、まるで電流が通つたような音がする。

「……まずは第一閥門突破……って訳だな」

菊次は手にした超小型のスタンガンを背広の内ポケットに仕舞うと、唱子を抱ぎあげる。

「すまない。来店直後で悪いが、店員の子が倒れてしまつた」

「ウソ！ ショーコちゃんは大丈夫ですか!?」

「一応、俺が病院に運んでおく。心配はするな……」

「すみません、菊次さん……ショーコちゃんをお願いします」

「よう、目が覚めたか」

「……貴方は……どうして私をここに？」

「俺はお前さんを調べてたんだよ……月浦村の、元住人として」

月浦村の名前を出され、唱子の瞳が釣り上がる。

「そんな怖い顔すんなよ。俺は別に、お前に復讐とかチヤチな事は考えてない」「なら……どうして？」

「……お前の中のカミサマを、本格的に目覚めさせてやろうかと――

扉が吹き飛ぶ。

現れた人影は、唱子にも見慣れていて……

「唱子っ！」

「新さん！」

「……思つたより速かつたな、新」

肩で息をしながら、新はそこに立っていた。

「……唱子に、何をしやがった」

「まだ、何もしていなさいさ……そもそも、お前が居なければ、俺たち『韋駄天』がコイツを保護し、人類守護の剣とえていたんだがな……」

「人類守護の……剣……？」

「俺の目的は話したぜ……お前の番だ、新……お前は何を思つて、コイツを助けようとす
る？　お前は俺に言つたよな……『どんな理由があろうと、人殺しは絶対の悪だ』と
確かに、新は嘗てそう言つた。」

「そうだよ、その通りだ菊次さん。でも……唱子の事を信じるつて言つたのも俺だ。そ
れに嘘は吐きたくない」

「……分かり合えんな、新……まあいい。お前を正面から負かせて、コイツは韋駄天が保
護する……」

「……望む所だよ、菊次さん……！」

「……やめて」

新さんの拳が受け止められ、菊次さんの掌底が入る。

吹き飛ばされて血反吐を吐く新さん。

容赦なく新さんに近寄つて、追撃を掛ける菊次さん。

「やめてよ……」

何時からか、私の頬には涙が伝つていた。
自分の為に争つてゐるから?

否。

目の前で血が流れているから?

否。

それならどうしてなのだろう。

新さんは、私のお父さんと似てた。

私の事を話しても、嫌な顔せずに聞いてくれた。

新さんは私の事を、心からの親愛で抱き締めてくれた。

これは、私の能力チカラが言つてる。

それと同時に、黒いナニカも込み上げてくる。

ああ、これは、まるで――

あの時と同じだ。

知らぬ間に口遊む、想オモイガミい神たる私の旋律。

あの村を血に染めた……私だけの旋律。

これに意味を付けるなら――

G n i t a h e i d r G r a m

v o n

r a x e l

t r o n

『神でありても、血に染まりて』

「……唱子!?」

「まさか……纏つたってのか……ロールアウトした直後にロストした、シンフォギア——グラムを」

菊次は新を壁まで蹴飛ばすと、唱子の下に歩み寄る。

「それを嬢ちゃんが持つてるのは予想外だつたが……なら、尚更……俺の所へ来い」

「……だ」

「何だつて?」

「嫌……だ。私は、新さんと……ずっと一緒にいる」

「その力を持つたままじや無理だな」

「誰が決めた、無理だつて……」

小剣が殴り飛ばされ、菊次の頬を掠める。

「……例え私が血に塗れても……私は、その可能性を否定するつ！」

「……無意味だ。無意味が過ぎる」

先程の新と同じく、鋭い踏み込みからの掌底が唱子に——

「唱子つ!？」

当たりはしたが、先程の威力は失せていた。

その証拠に、菊次の背中からは

唱子の持つ、大剣の刃が伸びていた。

同時に、刃の美しかった空色も……菊次の血が染み込むように、赤く、紅く、赫く染まる。

「…………」れで、いいんです

『Embrace / Death』

唱子の頬の涙が、止まることは無かつた。

「唱子……っ！」

「あは、あはは……新さんだ……」

「どうして……なんでっ！」

瞳に光は無く、菊次の躰から刃を引き抜き、首を飛ばす唱子。

「あのままだと新さんが死んじやいます。あのままだと私の前で新さんが死んじやいます。あのままだと私のせいで新さんが死んじやいます。あのままだと私が攫われてしまつたから新さんが死んじやいます。あのままだと私が月浦村から出てきたせいで新さんが死んじやいます。あのままだと新さんが私の事に興味を持つて私の事を調べて

しまつたから興味を持たせた私のせいで新さんが死んじやいます。あのままだと私的事情を抱き締めてくれたから菊次さんに新さんが殺されちゃいます」

「違う！ 違うんだ、唱子！」

「なら何だって言うんですか、私のせいで新さんが死んじやいそうになつちやつたから、新さんを殺そうとする人を私は殺しました。私は新さんの物になる、そう言いましたよね？ 新さんが死んじやつてしまつたら物を使う人がいなくなります。持ち主のいいな物なんて物の役目を果たせません」

「唱子……やめてくれ、頼む！」

「これ以上これが抵抗しないようにしないと……」

首を飛ばされている菊次の躰に、逆手に持つた大剣を叩きつける唱子。

腕も、足も、腰も、胴も……グチャグチャに切り刻まれる。

「あは、あははは……もうボロボロになつちやつた……」

大剣を地面に落とし、ギアが解除される。

新は痛みに耐えながら、唱子の元へ駆け寄り、狂ったように笑い続ける唱子を……ずつとずつと、抱き締めていた。

Act 9：暗闇の先へ

「……」

気がつけば、私は昏い所へ居た。

「……」

手は動かせないし、視界は昏くて見えない。

耳は塞がれていなが、何も音が聞こえない。

「……あつ」

近づく足音。扉の音からして、恐らく私は、牢か何かに繋がれているのだろう。

「……これより、櫛原唱子くんの聴取を始める」

「お願ひします」

「そこ」で、何を……ツ！」

天羽奏が見たのは、肉片になつたナニカと、頬を血と涙に濡らした……数日前に訪れた喫茶店で、ウエイトレスを務めていた少女の姿があつた。

彼女を抱き締める男も、同じ喫茶店で働いていた人物だと見受けられる。

「どういう、ことだよ……オイツ！」

「貴女は……じゃない！ 唱子はどうして襲われたんですか!? 唱子の使つてたアレは何ですか!? どうして唱子は——菊次さんを殺さなきやならなかつたんですか!?」

菊次、という名には聞き覚えがあつた。

ツヴァイウイングのマネージャー、緒川が話していた人物だ。

「なんで菊次の名前を……まさか、ソイツが……それが菊次だつてのか!?」

奏の目には二人の人物と肉片しか映つておらず、それが菊次だと信じ難い。

『奏、その二人を拘束しろ。少女の方は特に厳重にだ』

「ああ、分かつたよ……」

力無く答える気力しか、その時の天羽奏には残されていなかつた。

「菊次を殺したのは……君なのか?」

「ええ、はい。新さんが死んでしまう寸前だつたので、つい殺しちゃいました」

至極当然という風に、淡々と殺したと語る唱子に、男は問いかける。

「なら、質問を変えよう……月浦村の惨劇も君が引き起こしたのか?」

「ああ、そうですよ？あの時は私のお父さんを家ごと焼き殺されてたんですよね」

「……まさか、あの半分焼失していたあの家か」

「その家です。まあ、私がどうしてやつたかはだいたい検討がついてると思うので言いませんが」

唱子の語りはなおも続く。

「最初の一人は四肢を切り落としました。二人目は妊娠していたので、お腹から子供を取り上げてあげて、その後心臓を刺しました。三人目は首を斬りました。四人目は磔にしました」

「……もういい」

「五人目は剣で串刺しにしました。六人目は――――」

「もういいと言っているツ！」

「あはは、オーバーですね。たかだか五百三十二人くらい、いなくなつても損害なんてないじやないですか」

心底おかしいと思うように、唱子は続ける。

「それに私、思うんですよ。そもそも人の心を捨てた人が、人を騙るだなんておかしいつて。化物扱いされてた私からすれば、ですけど」

「……まさか、君が……」

「ご明察。私こそ月浦の血を引く、想い神の末裔です」

確かに、あの村の中で唯一の行方不明者として言われた唱子は、菊次の調査で想い神

オモイガミ

の力を継いでいると言われていた。

「……最後だ。そのギアは……どこで手に入れた？」

「お父さんからの贈り物ですよ。まあ、こんな力があるなんて知りませんでしたが」

結局、あのペンドント——シンフォギアは回収され、私の拘束は解かれぬまま、一週間の時が過ぎた、らしい。

「度々すまない。君の処分が決まった」

「何處ですか？ 牢獄？ それとも絞首台ですかね？」

そう問い合わせた直後、拘束と視界が開放される。

「……なんのつもりですか」

「その方面のお偉方の意見としては、『証拠不十分』だ。そもそも俺たちが扱つてる物を、おいそれと明るみに出すわけにもいかない。それが、政府の出した決断だ」

そう言つて、大男はペンドントを投げ渡してくる。

よくよく見なくとも筋骨隆々で、かつての村民とは違つて自分の事を色眼鏡で見ない目だ。

心の声も、自分の事を心から信用している。

「その代わりと言つてはなんだが、君を二課——特異災害対策機動部二課に所属さ

せる事が条件、だそうだ」

「……」

「どうする？」

「……分かりました。その条件を呑みましょう」

「そうと決まれば、これから俺たちは仲間つて訳だ。俺は風鳴弦十郎。一応、二課の司令をやつてる」

「櫛原唱子。カフェ・シエスタの従業員です」

私たち握手を交わす。

どうにかこうにか、私の安寧は保たれたようだ。

蠟燭の立ち並ぶ和室。

それに照らされる一人の老爺が、直属の部下の報告を聞いていた。

「『韋駄天』の菊次が殺られた、か？」

「はい。恐らくは……櫛原唱子のシンフォギアに依るものかと」

「竜滅の魔剣が人の血を吸うたか……」

「彼女に眠る『神』を、目覚めさせる事より遠ざかつてしましましたが……」

「好い。好い状況だ……血に穢れた想いの神を、暴走させるのも悪くはなかろう」

老爺は口の端を引き裂くように笑みを作ると、立ち上がる。

その所作は力強く、動きだけでは老体だと判断出来ないであろう。

「護国の為、防人の務めを果たす為にあの力は、何れ儂が手に入れる」

そう叫んだ直後、立ち並んでいた蠟燭の火が全て同時に消え去つた。

「唱子！」

「……新さん」

基地の外へ出される前に、同じく拘束されていたという新さんと合流する。

「……あー……その」

「……幻滅しましたか？　血塗れの私の姿は」

「違う。違うんだ唱子……ありがとな」

「え……？」

急に抱き締められ、私の顔も上気していくのが分かる。

「結果はどうあれ、俺が唱子に助けられたのはホントだよ。何度も言うさ……ありがとな」

「……つ、そつ、そういうの……なんでこんな所で言うんですか……」「ははっ、悪かったよ……でも、今言つておきたくてな」

「もー…」

唱子は唇を尖らせながらも、新の事を抱き締め返す。

「……私の方こそ、あの時抱き締めてくれて、ありがとうございます」

「あの時は、それくらいしか出来なかつたからな。唱子も——つ？」

新の唇は唱子の唇によつて半ば強引に塞がれ、三秒程ではあつたものの、新を戸惑わせるには十分だつた。

[...]

「唱子……今のは」

「気に、しないでください。したかつた、だけですから」

そう。したかつただけ

「唱子、大丈夫か？」
顔が赤いぞ？」

「うるさいです。気にしないでと言つたじやないですか」

「気にするつて、唱子が赤くなつてるんだからさ」

「尼加拉瓜」

「怖えよ！ しかももう叩いてるし！」

ただ

ここまでしないと抑えられない、自分に巢食つた何かを斬りたい衝動は、どうすれば無

63 A c t 9 : 暗闇の先へ

く
な
つ
て
く
れ
る
の
だ
ろ
う
か

Act 10：日常に神は溶け込んで

「新さん、いますか？」

唱子が新の部屋のドアをノックする。
数秒置いて、部屋に入るよう促された。

「唱子、どうしたんだ？ 突然」

「ええと……私の買い物に付き合つてください」

「良いけど……ナナミじゃなくて、俺なのか？」

「新さんが良いんです。ほら、ついてきてくださいってば」

「あつ、ちよつ、唱子！ セめて着替えさせてくれ！」

未だ寝間着のままの新を引っ張つて進もうとする唱子を、引き止めるように新も堪える。

今日はカフェ・シエスタも定休日。

暫しの安息は、此処に。

大規模ショッピングモール “イネス” 。

ナナミ曰く、『どんでもない複合型モール』であり、実際に病院やらゲームセンター、公民館すらあるショッピングモールだ。

「何を買いに来たんだ？」

「ええと、そろそろ冷えてくるのでコートと、私の日用品と……まあ、後はお店で使う道具の買い出しだすね」

「分かった。じゃあ行くか」

「はい！」

入口から入つて直ぐに、唱子の目当ての店はあつた。

「『グライム』……？」

「洋服屋さんです。ここで上着を揃えちゃいましょか。新さん、コートが無いって言つてたじやないですか」

「あー、覚えててくれたのか！ 僕も忘れてたからな……」

「忘れないでくださいよ？ これからは寒くなるんですから」

「そうだな……」

「あ、新さんはこれとか似合いそうですよ！」

「これが……おつ、安いな……」

「私のも……選んでほしいです」

「これだな……」

暫くコート選びは続き、唱子と新は一番気に入つた物を購入した。

そして、その光景を外側から見る者が1人。

「……『韋駄天』式から通達。壱より引き続き、想い神の観測オモイガミを開始します」

ここ数日、特務部隊『韋駄天』は、特異災害対策機動部二課にすら任務を秘匿し、櫛

原唱子の“観測”を始めていた。

「対象のバイタル、安定。観測を続行します」

通信を切断し、唱子に向き直る。

「……あんな一人の小娘に、神の力が宿つてゐのかねえ……？」

タブレット端末を待機状態へ戻し、彼のジャケットに着けられたバッジを見る。

「ま、俺は韋駄天。小娘にも、隣の奴にも捉えられないさ」

「唱子、これとかどうだ？ 似合いそうだけど」

「……スカート、短いんですけど」

「あ……唱子つて、もしかして苦手だつたか？ ミニスカート」

「ナナミさんにも言われましたよ、それ。なんというか……無防備の象徴みたいで……」

「そうか……なら、これは戻して……」

新が棚に戻そうと、スカートを手に取る。

「ま、待つてください……」

「唱子？」

「……新さんが着て欲しいって言うなら……着ない事は無いんですけど……
「……いいのか？」

「でも！ 新さんと一緒に出掛けの時だけです！ それ以外では絶対着ません！」
「わ、分かった分かった……」

「あ！ 新さん今喜んだ！ 私が着てもいいって言つたら喜んだ！」

「喜んでない！ 喜んでなんてないぞ！」

「嘘！ 絶対嘘です！ 私の目は誤魔化せませんよ！」

そのやり取りを目撃され、彼ら彼女らの “声” が聞こえたのか、唱子の顔が目に見えて赤く染まっていく。

「……新さんのせいですよ」

「それはさすがに理不尽だろ!?」

「はー、なんか疲れましたよ」

「唱子、お前なあ……」

「新さんが変なこと言うからです」

「……悪かつたよ」

「新さん……じゃあ、あそこ行きませんか?」

唱子が指すのは、クレープ屋のワゴン。

街でも美味しいと評判のクレープは、偶にシエスタでも話題に上っている。

「じゃあ、食べに行くか」

「ですね……」

ワゴンの列は幸運にもあまり長くはなく、直ぐに新と唱子の順が回ってきた。

「おつ、お二人さんは何にする?」

「私は……このチョコレートのを」

「俺はこつちのバナナのかな」

「バナナとチョコレートな、O.K。お熱いお二人にちょっとだけ具材はサービスしてやるよ!」

数分で二つのクレープが完成し、手渡される。

「熱いから気をつけろよ」

「ありがとうございます。いただきます」

静かにクレープを頬張る唱子と、自分のクレープを齧りながら唱子を眺める新。

その“声”に気付いたのか、唱子が新に視線を向ける。

「どうしたんですか？」

「いや、唱子……クレープ、ひとくち分けてくれないか？」

「……良いですけど……ひとくちですよ、ひとくち」

目を逸らしながらも、唱子は新の口にクレープを運ぶ。

「ん、こつちも美味いな……俺もこれにすればよかつた」「あ、新さんのも分けてください、ひとくち」

「良いぞ、ほら」

「はむつ……」

ゆつくりと咀嚼する唱子。

そして、それを見る新。

「どうなんだ……？」

「……お、美味しい……です……」

「唱子？」

「美味しいです！」

「そうか……やっぱり話題になるだけあるよな……」

「…………あつ」

「どうしたんだ、唱子」

先程の洋服屋での一幕よりも、赤く赤く染まつていく唱子の顔。

「唱子!？」

「…………、これ……関節キス、ってやつですかね」

「……言われてみれば」

「うーつ…………」

「でも、唱子とは前にキスしたよな？ なら大丈夫なんじゃ……」

「それと、これは……話が、別なんですっ！」

赤い顔を隠すように、唱子は顔に手を当てていた。

その様子すらも、誰かに観測されている事に気付かず。